

カルト支援」に携わる宗教者には往々にして、当事者を自らの信奉する宗教的信念に同一化させることが最善と錯覚する誘惑が起こるが、それは即ちカルトの収奪構造に近似した関係性を志向するものと言い得るのであり、自宗教への帰属を促す「伝道」と混同してはならない。

宗教団体が復興支援運動の母体となるとき、自集団の「徳性」を実証する機会としたり、ボランティアメンバーや被災者たちへの「伝道」を目的としたりする誘惑が発生しやすい。実際、宗教者たちが復興支援を「伝道」と位置づける例が複数ある。被災者支援を宗教的「救済」に位置づける視点は、災害や放射能被害を宗教的因果関係に構造化し、「救う者×救われる者」という非対称の関係を構築する。「カルト」とラベリングされる集団の活動だから危険なのではなく、こうした志向性そのものから既に「カルト」の危険が開始されるのである。

このたびの震災と原発事故により生じた被害からの回復は、カルトからの被害回復と同様に、決して「元通りになる」ことを意味し得ない。回復され得ない被害を引き受ける決断を出発とし、より完成度の高い新しい社会を再構築する働き人として成長する決意を共に分かち合うという方向が、震災後の宗教における霊性の指標とされるべきではないだろうか。

パネルの主旨とまとめ

新免 貢

長谷川（間瀬）恵美氏は、「魂への配慮―被災地校教育支援の現場から」と題する発表において、岩手県釜石市唐丹小学校、

中学校の教育支援活動を通して宗教の社会的貢献のあり方の認識へと導かれたことを報告した。パストラル・ハープを使用したスピリチュアル・ケアは、地域の理解と協力のもとに、被災した子供たちと共に祈りの時間と場を共有しながら、心身に刻まれた癒しがたい痛みとトラウマに時間をかけて寄り添う働きである。この働きを通して、被災した子供たちとケアにあたる側の双方が、見捨てないこと、憶え続けることが忍耐と希望の源泉であることに気づかせられていく。このように人の魂に配慮し、共感的に関わる宗教活動の実践は、功績主義の枠から人間を解放する方向を目指しており、閉塞状況にある社会を変革する原動力にもなりうる可能性を秘めている。

坂井祐田氏は、「被災者支援において、〈仏教的〉であるとはどういうことか?」と題する発表において、〈人間的〉支援活動と〈仏教的〉支援活動の違いはあるのかという問いを提起し、親鸞にまつわるエピソードを紹介した。親鸞は、越後流罪を赦されて、洪水と飢饉に見舞われた佐貫の地（現在の群馬県邑楽郡）に滞在した折、三部経の読誦を決断したが、これを中断した（『恵信尼消息』）。人間を救うのは阿弥陀仏であって人間ではないとする〈仏教的〉な自覚に照らして、親鸞は自身の支援行動を止めたことになる。この出来事は、人間的情念に支配されず、内省や洞察を促す超越者に根拠づけられた霊性的自覚を仏教者のあり方とする認識にわれわれを導く。また、こういう霊性的自覚こそが、いかなるものにも束縛されない震災後の粘り強い支縁の広がりを支える。

自身がカルト脱会者でもある竹迫之氏は、『再構築』への奉

仕―脱カルト支援を手がかりに」と題する発表を行ない、上述の二名の発表者とは違って、宗教者側による実践活動に潜むカルト的側面に注意を促した。復興支援を「伝道」と位置づける宗教者たちの活動は、「救う者」と「救われる者」という非対称の関係を構築している点で、ボランティアを志す人々の「善性」につけこみ、復興協力が紛れ込んで蠢動する各種カルト団体の手法と志向性が類似している。震災と原発事故の深刻な痛手からの回復は、カルトからの被害回復と同様に、「元通りになる」ことを意味し得ない。むしろ、回復され得ない被害と心の深い痛みを引き受ける決断を共に分かち合う「脱カルト」的方向が望まれる。こういう「脱カルト」的方向を視野に入れた「カルト」再定義の学的作業が今後求められる。

研究者であると同時に宗教者でもあるこれら三名の真剣な実践活動に基づく現場報告的発表の重要性と意義を指摘した上で、本パネル代表者の新免は、阪神淡路大震災と東日本大震災の体験者として、公安によるマークなどのリスクを伴う自らの被災者支援活動をも踏まえ、3・11以降の諸宗教共同による国家総動員法的な支援活動の異様な盛り上がりに対する違和感、第三者が語り得ぬ被災者の苦しみを前にした既成の宗教言説の限界、国家による宗教統制に結びつきうる「宗教の公益性」という発想の危険性、震災体験を語らせられている側とそれを記述する側という奇妙な図式、障碍者、高齢者、生活弱者などの災害弱者に対する市民的な継続的支援の重要性、行政の管理の枠を超えて自由に動き回る政治提言ボランティアの必要性、並びに、課題共有重視型の宗教論を中心にコメントした。

難問が山積する東日本大震災後の過酷な現実に立ち向かうためには、カルトと同質の収奪システムの枠組みの中にある支配装置としての制度的宗教から、情念に左右されない靈性に裏打ちされた共感的宗教への転換が、宗教言説においても要請される。こういう時代的要請を現代宗教論の中に加えることが震災後の重要な宗教学的課題であると言えよう。

伝統の危機とユダヤ教

――築きあげたものが壊れるとき――

代表者・司会 勝又悦子

コメンテータ 小田淑子

翻訳聖書に見る「危機」解釈と克服

――金の子牛像事件を中心に――

大澤 耕史

本報告では、出エジプト記三十二章冒頭に描かれている金の子牛像事件について、ユダヤ教の翻訳聖書におけるその解釈を考察していく。金の子牛像事件とは、エジプトを出たイスラエルの民がシナイ山に至り、山上でモーセが神から十戒を受けている間に、ふもとでモーセの下山を待っていた民が、アロンにせまって金の子牛像を作らせ、その前で祭を行うというものがある。その結果神は激怒し、モーセがただちに下山して子牛像